

（セッション NO. 12）「5年、10年、30年後の“自分”・“わが町”を考えよう！」

○開催日時：平成27年9月17日（木）14：00～ 16：30

○場 所：広野町中央体育館2F会議室

○コーディネーター、

堀川直子（福島大うつくしまふくしま未来支援センター特任研究員）

ファシリテーター、

辻明典（哲学者）

○参加者数 約 15名

○概 要

1. 「てつがくカフェ」のスタイルを導入して、このテーマを進行した。
2. まず、コーディネーターがこのワークショップの趣旨説明し、哲学カフェのファシリテーターから、哲学カフェの概要、進め方、ルールを説明した。参加者の発言内容をホワイトボードに板書する役目をコーディネーターが兼任。
3. 内容的には、現状を知ること、3. 11の前と後、
今の気持ちは普通ではない。違和感がある。精神的な不便さがある。
喫緊の課題は原因を吸い上げる。——行政側
日常であったことが非日常になる。そしてそれが普通になる。
帰町はそこで定住すること。
30年後は廃炉が終わる。次の世代に託す、安全・安心が戻る：トンボのある風景、放射能のことを考えないで済む。
帰町出来ない要因：放射能に対する不安、教育、医療環境、不便さ。
便利な暮らしが仮設住宅で慣れた。
4. 今までの意見からキーワードをみなで探す
不便、
次世代・子ども
きっかけタイミング
5. キーワードを使って問いを作る
不便さの価値を高めるにはどうすればいいか？
不便さを追求する。不便だからいいこともある
不便さを違った角度から見るにはどうすればいいのか？
考える時間を作る、相手のことを考える

○クロージング（まとめ）

- ・ワークショップに先立ち、サマーフェスティバルでの短冊に同様なテーマで書いてもらったが、その内容にはあえて言及しなかった。それは、あくまでワークショップの参加者たちとの対話であることを重要視したためである。幸い、参加者の一人が短冊にも書いたと前置きして意見を述べたことは、短冊の内容を発言者が熟考したと言えるだろう。短冊方式は匿名の町民たちの考え方を知ることができるし、継続して実施することで考え方の変化を見ることが出来るだろう。
- ・本セッションの成果

初めての試みである「てつがくカフェ」の方式に対する戸惑いが見られた。通常のワークショップは、パネラーが発表、参加者は傾聴して疑問を聞き、意見を述べるという形式が主で、参加者もその形式に馴染みやすい。「てつがくカフェ」は、フラットで安心できる関係のもとで進める哲学的な対話である。ファシリテーターは、発言者の言葉の意味を吟味したり、発言者たちの意見を関連づけ、対話を促進する。被災者たちはさまざまな「思い」や「疑問」を胸にしまったまま、さまざまな場所で、日々を過ごしていると思う。そういう思いや疑問についてじっくり考え、お互いの話しにじっくりと耳を傾け、ともに生きて行くための言葉を探っていくものである。主体的に自分の言葉で自分の考えを「対話」という営みによって行うものである。専門知識は必要なく、そもそも「自分」、「わが町」って何だろうという疑問からはじまり、「話す」、「聞く」ということを丁寧に積み重ねることである。鷲田清一（2013）によれば「合意よりも、問題の所在を探ること、問いが書き換えられていくプロセスそのものをシェアすること」である。

今後の我が町に対するイメージを対話によって進行したことで、最後に、参加者自身が「不便さとは何か」という問いを導き出し、答えを考えたことは有益であったと思う。時間が許せば、「次世代・こども」についての問いを作ることが必要であった。今後とも、今回のワークショップを引き続き「てつがくカフェ」を導入して進行する意義はあると考える。